

「SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP)」第 20 回ワークショップ開催

2022 年 10 月 12 日、SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の第 20 回ワークショップがオンラインで開催され、参加大学 21 校から 47 名が出席しました。今回は、中国・清華大学 SDGs 研究所のジェン・イー所長をお招きし「Knowledge and Partnership: Tsinghua's Action towards the UN SDGs (知識とパートナーシップ: 清華大学の国連 SDGs に向けた取り組み)」と題して講演をしていただきました。本講演では、清華大学の多岐にわたるサステナビリティ活動の 4 つの重点項目が紹介されました。

第一の重点項目は、大学の基本的な役割である「人材育成」です。清華大学には数多くの SDGs 関連コースがありますが、2017 年からは、ジュネーブ大学との連携による特別コース「Dual Master Program of Public Policy for SDGs (デュアル・マスタープログラム : SDGs のための公共政策) (MPP-SDG)」が開講されています。本プログラムは、SDGs 達成に必要な理論の理解および実践的な現地調査の経験を融合させるべく設計された 2 年半のコースで、最終的に論文審査に合格すると両大学から修士号が授与されます。2018 年～2021 年までに 106 名の学生が在籍し、2022 年には 32 名が卒業、国際機関や民間組織のサステナビリティ部門に就職しました。その他に、農村部など遠隔地に住む学生に教育の機会を提供するプログラムや、経済的困難を抱える学生に海外学術交流支援を行うプログラムなどの充実にも取り組んでいます。

第二の重点項目は、生涯学習プログラムを通じた「社会貢献」です。社会全体に質の高い教育を施すという責任を果たすため、オンラインでさまざまなプログラムを広く提供しています。2015 年に質の高い大規模なオンライン講座 (MOOC) のプラットフォームを設立し、現在までに 5,880 万人以上の学習者が計 1 億 6,300 回以上コースを受講、ウェブサイト登録者数は 1 億人以上に達しています。世界のユーザーにより良いサービスを提供するため、英語で教える国際版オンラインコースも開始しました。また公衆衛生面での貢献としては、2019 年末に発生した COVID-19 の感染拡大に対応するため、中国全土から研究者たちが集まり研究を進めてきました。2021 年には清華大学生命科学部およびオーストリアとサウジアラビアのチームとの共同研究によって、コロナウイルスの高解像度の画像が公開され、感染抑制研究を進展させました。2020 年以降は、SDGs 関連の社会教育プログラムを充実させるため、408 の SDGs 研修コースが一般向けに新設され、その受講者は 5 万 5 千人にのぼっています。

第三の重要項目は「大学運営」です。清華大学は「全学で SDGs 達成に貢献すべく取り組み、大学の活動全てにわたって、効率的な運営を実現することが重要である」という認識を共有しています。1998 年からはグリーンな大学を提唱し、エネルギー管理のためのプラッ

トフォームを作ってネットゼロ・キャンパスを目指しています。

最後の重要項目は「研究活動」です。科学研究を重視する清華大学では、知識の生成、普及、応用において、SDGs を実施・主流化すべきだと考えています。2017 年の MPP-SDG の開始に伴って、清華大学とジュネーブ大学が共同で SDGs に関する協力を進めるためのプラットフォーム「清華-ジュネーブ SDGs イニシアチブ」の取り組みが始まり、清華大学には SDGs 研究所が、ジュネーブ側には SDGs ソリューション・スペースが設立されました。本イニシアチブは、学際的な研究を進めて、グローバルなパートナーシップを広げることで、SDGs 達成に向けた課題解決を推進するための主導的プラットフォームを確立することを目的としています。また、SDGs に対する理解を促進するために、SDGs をローカライズ（地域化）することを重視しています。清華大学は SDGs を地域に根付かせるため、広州市との連携に基づく「広州市の持続可能な発展のための政策と実施計画」に関する共同研究や、国連開発機構（UNDP）中国事務所との連携に基づく脱炭素化を推進するための研究を行っています。今後、当大学が SDGs のローカライゼーションに協力する必要性がますます高まっていくと予想されています。

イー所長は「SDGs の実践は、大学の教育・研究に影響を与え、社会貢献を促すだけでなく、大学経営やその他さまざまな活動を変革するきっかけにもなる」と指摘しました。また、「SDGs の多様な分野にまたがるサステナビリティの課題は、単独では解決できず、良好なパートナーシップを構築することが不可欠である」とも述べました。しかしながら、そこにかかる時間的コストは考慮される必要があり、清華大学とジュネーブ大学の連携が強固なものとして認知されるまでには 5 年間もの期間と努力を要したこと、そして、パートナーシップを深めるにあたっては情熱を持ったキーパーソンの存在など個人レベルでも努力が必要であったことが語られました。最後にイー所長は、今後も SDGs 達成に向けて大学が果たすべき役割を重視してさまざまな取り組みを推進していきたいと強調し、講演を締めくくりました。

その後、SDG 大学連携プラットフォームのチェアでもある UNU-IAS の山口所長がモデレーターを務め、イー所長への質疑応答が行われました。その中で中国国内のパートナーシップは、気候変動、エネルギー、教育など、分野別に連携しており、大学間や研究所間での緊密な協力体制があることが示されました。また、ジュネーブ大学とのデュアル・ディグリープログラムについては、広く募集を呼びかけて多様な学生の確保に力を注いでいること、充実した講座運営と多岐にわたる活動を組み込んだリーダーシップ教育カリキュラムを設けている旨が説明されました。SDGs 研究所の運営体制としては、4～6 人の専任スタッフとパートタイムの研究者が業務を行っているものの、民間部門からの資金による安定した財源の確保が今後の課題であるとの指摘がなされました。SDG-UP アドバイザーである関西

学院大学総合政策部の村田俊一教授からは、清華大学がトップレベルの SDGs 研究者を育成するに至ったターニングポイント、およびその際のマネジメント側の支援、SDGs 研究に携わった卒業生の進路について質問がありました。イー所長は、ジュネーブ大学との連携によって頻繁に海外で SDGs の議論に参加するようになった 2018～2019 年頃がターニングポイントだったとして、その当時に清華大学の多様な SDGs の取り組みを明文化し報告書にまとめる必要性を認識した、との回答を寄せました。そして、その際の報告書策定プロセスにおいて SDGs のコンセプトが学内に浸透し、学長と副学長による分野横断的な協力体制構築への支援や、関係者間での丁寧な調整が行われたことの重要性を強調しました。卒業生の進路については、6～7 割が国際機関などに就職し、そのほとんどが SDGs の専門家として働いていると回答しました。

続いて行われた参加大学によるグループ討論では「日本の大学の SDGs に関する取り組みが 2021 年以降に活発になった背景や要因」、「SDGs 教育促進のためのメカニズムや事例」、という 2 つのテーマで議論が行われました。1 つ目のテーマでは、大学による SDGs への取り組みを評価する Times Higher Education (THE) インパクトランキング が考慮されるようになったことや、持続可能性・多様性などのコンセプトが大学の中期計画でも示されるようになったことなど、外部要因による刺激が変化をもたらしているとの意見が出されました。その他にも、高校生や大学生などの若い世代の意識が高まったことや、SDGs が学習指導要領に明記されたこと、数多くの大学で SDGs を推進するための委員会が設けられたことなどによって、日々の業務にも SDGs の視点が組み込まれるようになったという意見が挙げられました。2 つ目のテーマに関しては、学生を SDGs に関する報告書を執筆する嘱託職員として任命する、大学・地域間の取り組みに研究者や学生を積極的に参加させる、SDGs に特化したウェブサイトを立ち上げ SDGs 事業に継続的に関わる大学職員のイニシアチブを重視する、といった取り組みの事例が紹介されました。SDGs 事業を実現させるための財源確保案としては、科学研究費、企業との共同研究による研究費、および寄付金の獲得といった手段を確立していくことが課題であるとの認識が共有されました。

以上をもって、活発な意見交換が行われたグループ討論を含む 3 時間のワークショップが終了しました。

参加大学 21 校（アルファベット順）

愛媛大学

広島大学

北海道大学

国際基督教大学

神奈川大学

金沢大学
国際大学
慶應義塾大学
関西学院大学
ノートルダム清心女子大学
沖縄科学技術大学院大学
大阪医科薬科大学
大阪公立大学
大阪大学
龍谷大学
昭和音楽大学
上智大学
創価大学
東京工業大学
東洋大学
北九州市立大学